

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴか／＼する鉄砲をかついで、白熊（しろくま）のやうな犬を二疋（ひき）つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさ／＼したところを、こんなことを云（い）ひながら、あるいてをりました。

「ぜんたい、こゝらの山は怪（け）しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構はないから、早くタンタアーンと、やつて見たいもんだなあ。」

「鹿（しか）の黄いろな横つ腹なんぞに、二三発お見舞まうしたら、ずみぶん痛快だらうねえ。くる／＼まはつて、それからどたつと倒れるだらうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行つてしまつたくらゐの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄（ものすご）いので、その白熊のやうな犬が、二疋いつしよにめまひを起して、しばらく吠（うな）つて、それから泡を吐いて死んでしまひました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼（ま）ぶたを、ちよつとかへしてみ言ひました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしさに、あたまをまげて言ひました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云ひました。

「ぼくはもう戻らうとおもふ。」

「さあ、ぼくもちやうど寒くはなつたし腹は空（す）いてきたし戻らうとおもふ。」

「そいちや、これで切りあげやう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買つて帰ればいゝ。」

「兎（うさぎ）もでてみたねえ。さうすれば結局おんなじこつた。では帰らうぢやないか」

ところがどうも困つたことは、どつちへ行けば戻れるのか、いつかう見当がつかなくなつてあました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さつきから横つ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもさうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。あゝ困つたなあ、何かたべたいなあ。」

「喰べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすゝきの中で、こんなことを云ひました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

といふ札がでてあました。

「君、ちやうどいゝ。こゝはこれでなかなか開けてるんだ。入らうぢやないか」

「おや、こんなとこにかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだらう」

「もちろんできるさ。看板にさう書いてあるぢやないか」

「はいらうぢやないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れさうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦（れんぐわ）で組んで、実に立派なもんです。そして硝子（がらす）の開き戸がたつて、そこに金文字でかう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言ひました。

「こいつはどうだ、やつぱり世の中はうまくできてるねえ、けふ一日なんぎしたけれど、こんどはこないゝこともある。このうちは料理店だけれどもたゞでご馳走（ちそう）するんだぜ。」

「どうもさうらしい。決してご遠慮はありませんといふのはその意味だ。」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になつてゐました。その硝子戸の裏側には、金文字でかうなつてゐました。

「ことに肥（ふと）つたお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎といふので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたつてゐるのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉（と）がありました。

「どうも変な家（うち）だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだらう。」

「これはロシア式だ。寒いところや山の中はみんなかうさ。」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でかう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやつてるんだ。こんな山の中で。」

「それあさうだ。見たまへ、東京の大きな料理屋だつて大通りにはすくないだらう」

二人は云ひながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずあぶん多いでせうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういふんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯（か）ういふことだ。」

「さうだらう。早くどこか室（へや）の中にはひりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉（と）が一つありました。そしてそのわきに鏡がかゝつて、その下には長い柄のついたブラシが置いてあつたのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、こゝで髪をきちんとして、それからきもの泥を落してください。」

と書いてありました。

「これはどうも尤（もつと）もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびつたんだよ」

「作法の厳しい家（うち）だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけづつて、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室の中に入ってきました。

二人はびつくりして、互によりそつて、扉をがたと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう途方もないことになつてしまふと、二人とも思つたのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸（たま）をこゝへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持つてものを食ふといふ法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来てゐるんだ。」

二人は鉄砲をはづし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套（ぐわいたう）と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とらう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来てゐるのは」

二人は帽子とオーバコート（か）を釘（くぎ）にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはひりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡（めがね）、財布、その他金物類、

ことに尖（とが）つたものは、みんなこゝに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちやんと口を開けて置いてありました。鍵（かぎ）まで添へてあつたのです。

「はゝあ、何かの料理に電気をつかふと見えるね。金気（かなげ）のものはあぶない。ことに尖（とが）つたものはあぶないと斯（か）う云ふんだらう。」

「さうだらう。して見ると勘定は帰りにこゝで払ふのだらうか。」

「どうもさうらしい。」

「さうだ。きつと。」

二人はめがねをはづしたり、カフスボタンをとつたり、みんな金庫の中に入れて、ぱちんと錠をかけた。

すこし行きますとまた扉（と）があつて、その前に硝子（がらす）の壺（つぼ）が一つありました。扉には斯（か）う書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗つてください。」

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれといふのはどういふんだ。」

「これはね、外がひじやうに寒いだらう。室（へや）のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきてゐる。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗つて手に塗つてそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残つてゐましたから、それは二人ともめいめいこつそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」

と書いてあつて、ちひさなクリームの壺がこゝにも置いてありました。

「さうさう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひゞを切らすとこだつた。こゝの主人はじつに用意周到だね。」

「あゝ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯（か）うどこまでも廊下ぢや仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶（びん）の中の香水をよく振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酔のやうな匂（にほひ）がするのでした。

「この香水はへんに酔くさい。どうしたんだらう。」

「まちがへたんだ。下女が風邪（かぜ）でも引いてまちがへて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中にはひりました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかつたでせう。お気の毒でした。

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺（つぼ）の中の塩をたくさんよくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどといふこんどは二人ともぎよつとしてお互にクリームをたくさん塗つた顔を見合せました。

「どうもをかしいぜ。」

「ぼくもをかしいとおもふ。」

「沢山の注文といふのは、向ふがこつちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店といふのは、ぼくの考へるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるので

はなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家（うち）とかういふことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」がたがたがたがた、ふるへだしてもうものが言へませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」がたがたがたがたふるへだして、もうものが言へませんでした。「遁（に）げ……。」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押さうとしましたが、どうです、戸はもう一分（いちぶ）も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

「いや、わざわざご苦労です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはひりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉（めだま）がこつちをのぞいてゐます。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそこそこんなことを云つてゐます。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないやうだよ。」

「あたりまへさ。親分の書きやうがまづいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかつたでせう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ。」

「どつちでもいゝよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉（く）れやしないんだ。」

「それはさうだ。けれどももしこゝへあいつらがはひつて来なかつたら、それはぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿（さら）も洗つてありますし、菜つ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜つ葉をうまくとりあはせて、まつ白なお皿にのせる丈（だ）けです。はやくいらつしやい。」

「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはお嫌ひですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげませうか。とにかくはやくいらつしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしやくしやの紙屑（かみくづ）のやうになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるへ、声もなく泣きました。

中ではふつふつとわらつてまた叫んでゐます。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるぢやありませんか。へい、たゞいま。ぢきもつてまゐります。さあ、早くいらつしやい。」

「早くいらつしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもつて、舌なめずりして、お客さま方を待つてゐられます。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」といふ声がして、あの白熊（しろくま）のやうな犬が二疋（ひき）、扉（と）をつきやぶつて室（へや）の中に飛び込んできました。鍵穴（かぎあな）の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはうとうとなつてしばらく室の中をくるくる廻つてゐましたが、また一声

「わん。」と高く吠（ほ）えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸ひ

込まれるやうに飛んで行きました。

その扉の向ふのまつくらのやみのなかで、

「にやあお、くわあ、ごろごろ。」といふ声がして、それからがさがさ鳴りました。

室はけむりのやうに消え、二人は寒さにぶるぶるふるへて、草の中に立つてみました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あつちの枝にぶらさがったり、こつちの根もとにちらばったりしてゐます。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうなつて戻ってきました。

そしてうしろからは、

「旦那（だんな）あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

二人は俄（には）かに元気がついて

「おゝい、おゝい、こゝだぞ、早く来い。」と叫びました。

蓑帽子（みのぼうし）をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやつと安心しました。

そして猟師のもつてきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買つて東京に帰りました。

しかし、さつき一ぺん紙くづのやうになつた二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯にはひつても、もうもとのとほりになほりませんでした。